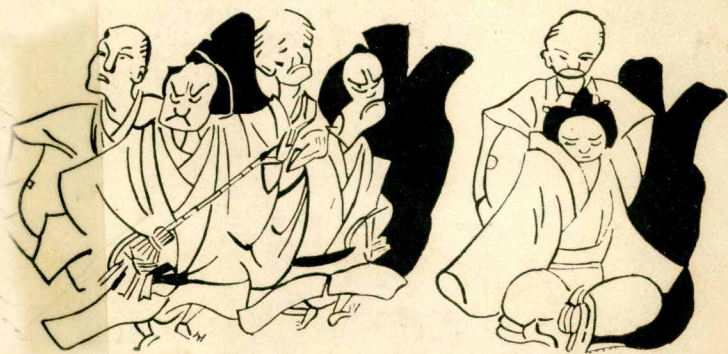


藤井乙男校註

近松世物語全集

上 卷



富山房

註校男乙井藤

近松世話物全集

上 卷



富 山 房

昭和十七年四月五日 初版発行
昭和四十七年八月二十日 七版発行

近松世話物全集 上巻

定価 八〇〇円

著者 藤 井 乙 男

発行者 坂 本 起 一

印刷者 文 弘 社
東京都千代田区飯田町一ノ二八

発行所 富 山 房

東京都千代田区神田神保町一ノ三
電話(二九一)二一七一一七
振替 東京 五四五二九

はしがき

近松巢林子の二百年忌記念事業として、大阪朝日新聞社の懇囑に應じて近松全集の編纂註釋に従ひ、その第一巻を出したのは大正十四年六月で、最後の第十二巻を出刊したのは昭和三年十月であつた。爾來すでに十有三年、その間、多少の讀書見聞は余が蒙を啓き、舊著の誤謬遺漏を發見して心ひそかに忸怩たるものあり。巢林子は『世繼曾我』の道行に「馬方いやよ」と踊唄の一句を取り入れしこと前後相應せず、一曲の瑕瑾、今聞くに汗を流すと、三十年前を後悔したといふ。翁の後悔は單に詞章上の一語句にとゞまる、それすら作者には三十年間心を悩ます種となつた。況んや學者として誤謬を後世に傳へることは死後までの氣がかりである。さりながら今や頽齡巢林子の享年を過ぎ、氣力日に衰へ、また改修の筆を執るの勇氣に乏しい。然るに近松全集編纂以來の知己内海幽水君深く余が心情を諒察し、出版の交渉、校正の煩勞に當らんとの懇篤なる激勵に感奮して、老懶に鞭うち茲に近松世話物全集を刊行する事となつた。本書の成つたのは全

く君が同情の祝で、感謝に堪へぬ次第である。

本書は一切原本通りの複製で、誤字・當字・假名違ひも訂正を加へず、節付も胡麻點以外は悉く保存し、謡曲・舞曲・半太夫・文彌・説經・間の山・地・詞・色・ハル・ノル・ウクは勿論、句點もすべてそのまゝである。たゞ一般讀者の便宜のため、假名書きの左傍に漢字をあて、懸詞は括弧を施してその意味を會得せしめるやうにした。

送り假名も概して不足がちで、見捨ては見捨て、書付ける・追懸けるは書付ケケル・追懸ケケルと讀ませる例になつてゐる。

あつばれ・かつばの如き半濁音符は原本にはないが、便宜上つけておいた。

言語の清濁も今日と異なるもの多く、安置はアンヂ、庵室はアンジツ、拔群はバックン、群集はクンジュ、安全はアンセン、輝くはカカヤクと讀むのである。

句點は語り物としての間隔を示すを主としたものであるから、讀み物としての句讀と一致する時もあれば、一致しない場合もある。例へば手を合せてぞ拜みけるを手を合、せてぞ拜みけると詞の中途に切り、ちどり足をち、ど、り足とわざとこまかく刻みたる如き類である。

註釋は本文に* 點を附し、欄外下端に行數を示し、各段の末に一括して掲げることとした。

昭和十六年八月

藤 井 乙 男 識

近松世話物全集 上卷

目次

はしがき	〔一—三〕
一 曾根崎心中（元禄十六年五月）	〔一—六三〕
解題	〔三〕
本文	〔九〕
〔註釋〕 其の一	〔二四〕
〔註釋〕 其の二	〔四九〕
〔註釋〕 其の三	〔五九〕
二 薩摩歌（寶永元年正月）	〔六五—一五五〕

解題……………〔七〕

本文 上之卷……………〔七〇〕

〔註釋〕……………〔九七〕

本文 中之卷……………〔一〇五〕

〔註釋〕……………〔一三三〕

本文 源五兵衛おまん夢分舟……………〔一三七〕

〔註釋〕……………〔一五五〕

三 心中二枚繪草紙（寶永三年三月）……………〔一五七—二〇八〕

解題……………〔一五九〕

本文 上之卷……………〔一六三〕

〔註釋〕……………〔一七四〕

本文 中之卷……………〔一七七〕

〔註釋〕……………〔一八九〕

本文 下之卷……………〔一九三〕

〔註釋〕……………〔二〇五〕

四 卯月の紅葉（寶永三年六月）……………〔二〇九—二五九〕

解題……………〔二二一〕

本文 上之卷……………〔二三四〕

〔註釋〕……………〔二三三〕

本文 中之卷……………〔二三六〕

〔註釋〕……………〔二四九〕

本文 與兵衛おかめ末期の道行……………〔二五一〕

〔註釋〕……………〔二五六〕

五 堀川波鼓（寶永四年二月）……………〔二六—二三四〕

解題……………〔二六三〕

本文 上之卷……………〔二六七〕

〔註釋〕……………〔二八三〕

本文 中之卷……………〔二八五〕

〔註釋〕……………〔二九九〕

本文 下之卷……………〔三〇一〕

〔註釋〕……………〔三一二〕

六 卯月の潤色（寶永四年四月）……………〔三五—三五六〕

解題……………〔三七〕

本文 末期の道行……………〔三九〕

本文 中之卷……………〔三六〕

〔註釋〕……………〔三四八〕

本文 助給書置 下之卷……………〔三五〕

〔註釋〕……………〔三五五〕

七 重井筒（寶永四年冬？）……………〔三七—四四〕

解題……………〔三五九〕

本文 上之卷……………〔三六三〕

〔註釋〕……………〔三七九〕

本文 中之卷……………〔三八三〕

〔註釋〕……………〔四〇三〕

本文 ちしほのおぼろぞめ……………〔四〇六〕

〔註釋〕……………〔四二二〕

八 心中萬年草（寶永五年四月）……………〔四二五—四六四〕

解題……………〔四二七〕

本文 上之卷……………〔四二九〕

〔註釋〕……………〔四三四〕

本文 中之卷……………〔四三六〕

〔註釋〕……………〔四五三〕

本文 下之卷 久米之介お梅道行……………〔四五五〕

〔註釋〕……………〔四六三〕

卷中挿入圖版

曾根崎心中（竹本筑後掾序文一葉、近松門左衛門序文一葉、六行本首葉、末尾、奥

書共三葉）

薩摩歌（八行本表紙、首葉、奥書共三葉、繪入本挿畫二葉）

心中二枚繪草紙（繪入本表紙、首葉、挿畫、奥書共四葉）

堀川波鼓（堀江川波鼓首葉）

重井筒（重井筒容鏡首葉、繪入本挿繪二葉）

曾
根
崎
心
中

曾根崎心中

近松が世話淨瑠璃の初作として劃期的に有名なもので、元祿十六年五月始めて竹本座に上演、享保二年同座にて再度興行の時、増補して少しく筋を變へた。享保十八年二月豊竹座興行のお初天神記は、この増補本の改題である。

曾根崎心中
大坂内本町醬油屋平野屋忠右衛門の手代徳兵衛、北の新地天満屋のお初と深く言ひかはし、主人の妻の姪と婚するを嫌ひ、且油屋の九平次に欺れしを悔い、曾根崎天神の森にて情死する顛末を書いたもので、最近の出来事であり、世話物といふ淨瑠璃には破天荒の試みであり、また當時おやま人形の名人辰松八郎兵衛がお初の人形を出遣ひに勤めるなど、大に人氣を煽つて花々しい評判を得たのである。

3
この大當りを羨んで豊竹座でも心中涙の玉の井この方前出なりとの説あれど、後出たる確證ありといふを出し、その翌年はお初の親友である丸屋しげといふ女郎が、お初の跡を追うて一人心中を企てた遊女誠草(豊竹座上演)ができ、浮世草子にも心中大鑑、諸國心中女など續々現れるやうになつた。その後寶曆十

一年五月豊竹座興行の曾根崎模様(若竹笛舁、淺田一鳥、福松藤助、黒藏主、中村阿契合作)明和五年七月竹本座興行の讀賣三巴(近松半二、八民平七、寺田兵藏、竹田文吉、竹本三郎兵衛合作)安永七年九月竹本染太夫座興行の往古曾根崎村噂(近松半二、近松善平合作)の如き、皆本曲の影響で、八文字舎本の曾根崎情鵲(寛延三年自笑、其笑合作)も亦この翻案である。歌舞伎の方では近松以前既に此心中を仕組みて演じたがさまで評判にならず、その後正徳五年四月大坂嵐の芝居で曾根崎十三回忌を二世嵐三右衛門が出し、享保四年の十七回忌には角座で心中野中時雨、江戸の三座で曾我狂言につきまぜて追善興行をなし、享保九年には曾根崎初夢曾我と題して角座の舞臺に上り、同十五年には市村座で心中黒小袖と題して、道行の場を出し、寶曆十一年八月江戸の市村龜藏大坂に來り、中村文七座にて徳兵衛に扮し、中村富十郎お初役を勤め、外題は女夫星浮名天神と稱した。

さて心中の時日は心中大鑑と外題年鑑には四月廿三日とあれど、攝陽隨筆に墓石の圖を出し、元禄十六年妙力信女靈とあるに従ふべきか。此曲中にも四月七日までに金を返せといふ文句あり、興行初日四月七日を五月七日としたるも、かたゞ縁ありげに思はれる。當時の遊廓は曾根崎新地にあらずして堂島新地なりとは、水谷不倒氏の創見で定説となつた。

此作は生玉心中と共に世話物中では筋の單純なものであるが、その道行の文は頗る有名で、徠が「七つの鐘が六つ鳴りて、残る一つが今生の鐘の響の聞き收め」といふに至り、案を拍つて近松の妙處この中にあり、他を問ふに及ばずと激賞したりとか、或は近松が「死ににゆく身の道の霜、一足づゝに消えてゆく」といふ所まで作りて案じ煩うてゐた時、偶、伊勢の俳諧師岩田涼菟來合せて、「夢の夢こそはかなけれ」とでもやり給へと助言したといふ逸話が、蜀山人によつて傳へられてゐる。徠の説は何に據つたのか知れないが、涼菟の話は明和二年黒露撰の俳書「摩訶十五夜」に出てゐる。眞偽は固より保し難いが、かういふ事から此作を、ます／＼有名にした事は疑ひない。然るに之とほゞ同じ文章が近松作の狂言本唐崎屏風八景の巻頭に「からさき心中道行」といふ名で出て居る。此狂言の上演年月は不明であるが、そのうちに三勝半七七年忌といふ劇中劇もあるから、元祿十五六年頃と思はれるが、精密に曾根崎心中との前後を決定しかねる。又元祿十七年三月版の松の落葉卷七、當流はやり歌の中に辛崎心中といふがあつて、これは曾根崎心中から取つたものとは、當時書籍の出版がかくの如き急速な進行を許さないといふ説がある。しかし十六年五月の作を十七年三月に出版する餘裕がないとは、いかに木版時代でも決していはれない事である。又文章としても松の落葉の方に無理な處が多く、やはり曾根崎の方を辛